慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	建久期の東大寺復興造像と鎌倉幕府
Sub Title	On the making sculptures at Tōdaiji Temple in the Kenkyu period by Kamakura Shogunate
Author	塩澤, 寛樹(Shiozawa, Hiroki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.21 (2006. 5) ,p.176(1)- 157(20)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20060531-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

建久期の東大寺復興造像と鎌倉幕府

塩澤寛樹

はじめに

源平合戦の最中の治承四年（一一八〇）十二月、東大寺と興福寺が炎上したいわゆる南都焼き討ちと呼ばれる未曾有の事件が起こったことはよく知られる。その翌年から着手された南都復興の事業は、その過程で様々な新しい文化を生み出すこととなった。それは彫刻史においても例外ではなく、康慶、運慶らによって推進された新様式が開花する舞台になったとして、研究史上かねてより注目されてきた。

とりわけ東大寺復興の第二段階ともいえる、建久五年十二月から始まる中門二天像以降、大仏殿内脇侍像・四天王像、南大門金剛力士像の造像は、鎌倉時代彫刻史の重要な節目と目されてきた。これらの造像は、慶派仏師が独占的に行ったことが判っており、南都復興当初、院派・円派に比べて劣勢であった彼らが、両派と肩を並べ、躍進を果た

したきっかけになったとみられてきた。ところで、これまで、この慶派による独占の原動力になったのは、東大寺の復興事業を幕府が強く支援していたからであり、文治年間以来、慶派と密接な関係を持ってきた幕府が、復興造像への起用を後押しをしたからと説明されてきた。近時、山本勉氏は、これは幕府関係の造像を担当する仏師の主流が成朝から康慶一門に移ったことのあらわれとされ、その理由として、康慶工房の規模の大きさを挙げておられる[1]。

しかし、鎌倉時代の彫刻史上、確かに大きな意味を持つ東大寺復興造像については、幕府の側からその造像事情を考察するという視点から眺めることによって、別な見方も可能かと私考される。そこで、本稿では、まず幕府による東大寺への復興支援の全体像を確認し、次いで院尊による光背制作の事情を検討し、その上で中門像・大仏殿内諸像の造像事情や仏師選定について、改めて考察してみることとする。

第一章　復興支援の状況、主体者、目的

最初に、幕府による東大寺復興支援の状況を年表で振り返りながら、基本的な問題を確認しておきたい。

まず、復興を支援した期間を確認しておくと、稿末の年表の通り、元暦元年（一一八四）に始まり、建久年間後半に及ぶかなり長期にわたっていることが知られる。したがって、東大寺復興に関わる造仏を考える際には、やはり全体を見通しての視点が必要であると思われる。また、支援の内容には、米や黄金などを奉加するという直接的なものと、配下の御家人に命じて仕事を請け負わせるという間接的なものがあることも分かる。

その上で、改めてこれら支援の幕府側主体者について考えてみる。それぞれの内容を伝える史料・文書を見ると、それらはいずれも主体者が頼朝であることを伝えている。つまり、この復興支援は幕府によるものといえなくはない

が、より正確には頼朝の強い意志によるものと捉えた方がよい。もっとも、頼朝執政下においてはほぼ全ての判断・決断が基本的には彼によってなされているといってよいので、復興に関わることだけが特別なことというわけではない。とはいえ、頼朝が継続して並々ならぬ意志をもって行ったことは確かであり、これを正しく認識しておくことは、考察の前提として重要と思われる。よって、以後、彼をこの支援の主体者と見て検討を進めてゆく。

次に、支援の目的について考える。これについては、これまで頼朝の信仰心もさることながら、むしろ東大寺復興の大檀越となるという政治的意図が指摘されることが多く行われてきた。本稿もそれに全面的に賛同したい。頼朝の意図は、例えば『吾妻鏡』文治元年三月七日条に載る頼朝が南都衆徒に送った書状に、「如レ旧令レ遂二修復造営一。可レ被レ奉レ祈二鎮護国家一也。」（旧の如く修復造営を遂げしめ、鎮護国家を祈り奉らるべきなり）、「王法仏法共以繁昌候歟」（王法仏法共に以て繁昌し候はんか）とあり、鎮護国家、王法仏法の繁昌という国家的な政治的目的を果たし、それを天下に示すことであろう。東大寺と対照的に、私寺の興福寺には冷淡であったことからも、東大寺復興に対する頼朝の意図と意欲を見出せよう。ただし、支援の経過や内容をさらに細かく分析することにより、彼の目的や関心の所在をより正確にみつけることができるように思われる。そこで、年表から頼朝自身が米・黄金・絹などを奉加した、直接的な支援を取り上げてみると、次の通りである。

①元暦元年六月の大仏鍍金用の黄金千両
②文治元年三月の米一万石・沙金一千両・上絹一千疋
③建久五年三月の光背漆箔のための砂金二百両
④同年五月の光背漆箔のための砂金百三十両
⑤建久六年三月の大仏殿供養に奉納の米一万石・沙金一千両・上絹一千疋及び東大寺への馬千疋

右を少し補足すれば、②は大仏開眼供養の五か月前で、奉加の内容が⑤の大仏殿供養の折とほぼ同じであるので、これは開眼供養への奉加と推察される。すると、頼朝が直接行った奉加の中身は、大仏鍍金（①）及び光背漆箔のための金（③④）と、大仏開眼供養（②）及び大仏殿供養（⑤）への米・金・絹等に限定されていることが分かる。これを見れば、彼の関心の所在は明らかであろう。つまり、大仏（本体と光背）の完成、とりわけ仕上げの金色と、大仏開眼や大仏殿建立といった区切りでの大きな供養の二つに絞られている。こうした最も中心となることへ奉加することにより、大檀越としての存在を効果的に天下に示すことを狙っているのであろう。そして、その総仕上げが建久六年三月十二日の大仏殿供養への軍兵数万を率いての参列であった。その姿が都人らにいかに強烈な印象を与えたかは、『愚管抄』[2]などに記される通りである。この時の参列で頼朝の目的はほぼ完全に果たされたとみてよいのではなかろうか。

以上を別の角度から見ると、前記のようないわば目立つ部分以外では、彼は直接の奉加などを行っていない。御家人らに命じて請け負わせるだけである。大仏殿建立にとって不可欠な木材調達に関しても、彼自身は費用負担をしていない。自ら奉加すべきことと配下に請け負わせることを峻別するという冷徹な姿勢は、実に徹底しているとさえいえる。こうした頼朝の支援に対する姿勢や方針は、その間の造仏の仏師選定を検討するうえでも重要であろうと思われる。

第二章　大仏光背の制作

建久五年（一一九四）三月十二日に始まった大仏光背の制作は、その後の中門二天像、大仏殿内脇侍像・四天王像

などに比べて、ことさらには注目されてこなかった感があるが、大仏の光背である以上、大仏殿内諸像よりも重要な、より上位の仕事とみられる。復興の経過から見ても、大仏本体の次で、脇侍像・四天王像より先である。このことは大檀越たることを目指す頼朝もよく理解していたと考えられる。第一章の通り、彼は自ら光背制作のために、漆箔用砂金を二度にわたり計三百三十両送っている。光背は大仏の一部である以上、その完成は来るべき大仏殿供養に不可欠であったからであろう。

ところで、この光背制作は、法印院尊率いる院派の主要仏師たちが担ったことが分かっているが、彼らの起用に果たして頼朝はどの程度関与していたのだろうか。結論からいえば、彼はこの仏師選定には関わっていないとみるべきであろう。院尊と頼朝といえば、ただちに思い浮かぶのは、かねて注目されてきた『吾妻鏡』建久二年五月十二日条である。この条は、院尊が造った源氏調伏の五丈毘沙門天像が近く供養されるとの報告に、頼朝が不快を示したことを伝えるが、これに何らかの圧力を加える工作をしたらしいこと、これを鎌倉勝長寿院本尊の仏師選定に当たり、院派を外した根拠とするのは難しいことは以前に述べたことがある。[3] しかし、それ以降のことに関しては話は別であろう。光背制作の仏師起用に頼朝が何らかの意志を及ぼしたとすれば、他に成朝も、康慶も、運慶も、あるいは円派仏師もいた中で、わざわざ院尊を選ぶというのはどうにも理解に苦しむのである。しかも、『吾妻鏡』は頼朝の奉加した砂金は直接京都の院尊のもとへ送っていることを伝えている。院尊一門の起用がいかなる経緯で決まったかはにわかには明らかにし難いが、頼朝の意志ではないことだけはいえるのではなかろうか。[4]

先述のように、光背は大仏殿内諸像より上位であり、頼朝の関心も高かった。東大寺復興造像の仏師選定に、全般的に頼朝の意志が反映されたのであれば、光背制作にこそ、その力が及んでしかるべきではなかろうか。第一章で眺めた頼朝の東大寺復興への姿勢や、院尊による光背制作などを見る限り、彼は東大寺復興造仏の仏師選定に何らかの

力を及ぼしているとは思えないのである。恐らく頼朝にとっては、誰によって光背が造られるかではなく、自らの奉加によって荘厳された光背が完成すること自体が重要で、その功により大檀越となることが関心事であったろう。それゆえ、この場合は担当仏師が誰であろうとも、その点に関心はなく、また、仏師選定にいたずらに介入する気もなかったのではないかと思われる。

第三章　中門二天像と大仏殿諸像の仏師選定

中門二天像と大仏殿内諸像の造像経過は、中門像は建久五年（一一九四）十二月二十六日に始まり、大仏殿内諸像については、『東大寺続要録』（以下『続要録』）、『東大寺造立供養記』（以下『造立供養記』）、『鈔本東大寺要録』（以下『鈔本要録』）などの記載に違いがあるが、毛利久氏の詳細な検討により脇侍像は建久七年（一一九六）六月十八日に始まり、八月二十七日に完成、四天王像は同年八月二十七日に始まり、十二月十日に完成したと整理され[5]、現在も受け継がれている。また、後述の通り、大仏殿内諸像の造像には奉行が存在したことも分かっている。そこで、ここまでの検討を踏まえて、これらの諸像の造像事情や仏師選定について考えてみたい。

まず、頼朝の関与の可能性について検討したい。第一章では、幕府方による復興の主体は頼朝で、彼は大仏本体に関わること及び二度の供養以外には直接の奉加はせず、それ以外のことは御家人に請け負わせたことを指摘した。その点からすると、大仏殿内脇侍像・四天王像を御家人達に奉行させたのは、決して異例のことではなく、むしろそれ以前からの一貫したやり方であったといえる。これら六軀についても、初めから頼朝は自ら関わるつもりはなかったと考えられる。さらに第二章において、大仏光背の仏師選定は、頼朝の意志ではないことを推定した。とすると、当

初から直接に関わる気はなかったと思われる大仏殿内諸像の仏師に関して、光背の時とは一転して、頼朝が何らかの指示をするということが果たしてあるだろうか。頼朝としては、御家人に命じて諸像を完成させることによって、大檀越としての面目を示せればよかったのであり、それ以上の細かなことに関心があったようには思われないのである。ここまでの検討からは、大仏殿内諸像の担当仏師に関して、頼朝が関与した可能性は極めて低いと導かれることを確認しておきたい。

そこで、次に幕府側奉行について考えてみることとする。大仏殿内脇侍像・四天王像の六軀に幕府側の奉行が存在したことを伝える記事として、『吾妻鏡』建久五年六月二十八日条がよく知られている。同条全文は次の通りである（『國史大系』本による）。「造東大寺間事。将軍家旁令二助成一給。材木事。仰二左衛門尉高綱一。於周二防國一。殊有二採用一。又二菩薩四天王像等宛二御家人一可レ致二造立一云々。所謂観音。宇都宮左衛門尉朝綱法師。虚空蔵。穀倉院別當親能。増長。畠山次郎重忠。持國。武田太郎信義。[6] 多聞。小笠原次郎長清。廣目。梶原平三景時。又戒壇院営作。同被レ仰二付小山左衛門尉朝政。千葉介常胤以下一訖。而其功頗遅引之間。今日所レ被二催促一也。但各偏存二結縁之儀一。可レ成レ功之由。御下知先訖。只以下随二公事一之思上。縡若及二懈緩一者。可二辞申一之旨。厳密被二触仰一云々。」（造東大寺の間の事、将軍家かたがたに助成せしめ給ふ。材木の事は、左衛門尉高綱に仰せて周防國において殊に採用有り。また二菩薩四天王の像等、御家人に宛て造立を致すべしと云々。いわゆる観音宇都宮左衛門尉朝綱法師。虚空蔵穀倉院別當親能。増長畠山次郎重忠。持国武田太郎信義。多聞小笠原次郎長清。廣目梶原平三景時。また戒壇院の営作、同じく小山左衛門尉朝政。千葉介常胤以下に仰せ付けられ訖んぬ。しかるにその功頗る遅引するの間、今日催促せらるるところなり。但し、おのおの偏に結縁の儀を存じ、功を成すべきの由、御下知先に訖んぬ。ただ公事に随ふの思ひをもってし、縡若し懈緩に及ばば、辞し申すべきの旨、厳密に触れ仰せらると云々。）

従来この記事は、奉行の割り当てを決められた記事として理解されてきたことが多かった。しかし、この記事の終盤では「事が頗る遅引」していることについて頼朝が催促をしたことが書かれており、この「事」の意味するところについては、意外に奥が深く、二通りの解釈があり得るかと思われる。一つは、その部分の直前の戒壇院造営だけを指すとする見方で、その場合遅れているのは戒壇院造営だけなので、催促を受けたのも千葉常胤と小山朝政以下となる。そして、その前に書かれている二菩薩四天王像の割り当てについてはこの日に決定されたという意味となる。この解釈は、堀池春峰氏をはじめ、[7]かなり広く行われていると思われる。しかし、いま一つ、「事」はその前の全てを受けると見る読み方である。これは古く『大日本史料』がその解釈を採っており、「是ヨリ先キ、幕府、家人ニ課シテ、東大寺ノ佛像及ビ戒壇院ヲ造ラシム、是日更ニ戒飭シテ、其工ヲ怠ルコト勿ラシム」との見出し文を付ける。[8]この場合、「遅引」していたのは、「材木事」、「二菩薩四天王像等」、「戒壇院造営」の三つとなり、催促を受けたのもここに名が挙がる全員ということになる。

右二者のいずれをとるか、にわかには決めがたいものの、記事全体の構成、文脈から見ると、この条は冒頭に「造東大寺間事。将軍家旁令助成給。」で始まり、「旁（かたがた）」に助成させた内訳として、「材木事」、「二菩薩四天王像等」、「戒壇院造営」の三つが挙げられ、それぞれは「又」でつながれて並立しているといえる。戒壇院のことについて、「同じく」と書いてあることからも、この部分が前からの続きであることが察せられる。とすれば、この記事の解釈は後者と見るべきかと思われる。

その前提に立つと、次のことが導かれる。

①「御下知先訖（御下知先に訖んぬ）」とされていること、また頼朝が強く催促したことから見て、脇侍像・四天王像助成の割り当てを行ったのは建久五年六月二十八日をある程度遡るであろうこと

②脇侍像・四天王像造立に向けた準備はこの時点で具体的にはまだ何も決まっていなかったか、ないしは停滞した状態であったこと

③頼朝が助成の遅れを気にかけていたこと、それゆえ厳しい催促をしたこと

後者の前提に立てば、①は当然のこととなるが、その場合、助成の割り当てを行った折の記事そのものは存在しないということは留意しておく必要があろう。

ところで、③に関連して、記事の様子からすると、頼朝は大仏殿内の「二菩薩四天王像等」の遅れについてかなり厳しい催促を行ったことが知られる。記事の末尾部分などはほとんど脅しに近い。大仏本体であればともかく、この六軀に彼がそれほどの関心を持っているのはなぜであろうか。前述した頼朝の姿勢から見て、六軀の完成を来るべき大仏殿供養に間に合わせようとしていたからとみるのが穏当であろう。恐らく頼朝の当初の目論見は、脇侍像・四天王像造立を含めての大仏殿の完成、及び二天像造立を含めた中門の造営を、大仏殿供養の前に終わらせることにあったのではなかろうか。中門の完成には、その前提として回廊の造営も含まれた可能性があろう。『続要録』供養篇建久記には、「入自東西廻廊中門」との記述がある。[9] 中門・回廊・大仏殿を揃えて、伽藍中心部の体裁を一通り整え、その上で大仏殿供養に臨むことを目指していたように思われる。

右の想定は、仏所や仏師の選定に関しても示唆を与えてくれる。これら八軀の現実の造像経過は、建久五年十二月末から始まった中門二天像が早く、大仏殿供養を挟んで、建久七年六月から脇侍像、同年八月から四天王像という順であるが、仏所選定に関しては、意外に早く、一括して行われたと推定することも出来よう。田邉三郎助氏は大仏殿内諸像について、「仏師の選定もあるいはこの時点であったかもしれない」とされ、[10]『吾妻鏡』が奉行人の名を記した建久五年六月頃の可能性を指摘された。前記①②の通り、頼朝の厳しい催促があったことから見て、同年六月二十八

日の時点で決定は行われていなかったであろうが、それ以降、中門像開始までには、康慶一門へ一括して注文されたと見てもよいのではなかろうか。そして、建久六年の大仏殿供養の際の康慶への勧賞に運慶が譲られて法眼になったことについても、経過だけ見れば康慶、運慶は何に対する勧賞かが見えてこないが、右のように考えれば、合点がゆく。この点についても田邉氏は、中門二天像に対する賞とみられ、「二天の仕事は康慶に下命になり、康慶の責任の下に定覚・快慶が一体ずつを担当したのではないか」と述べられて[11]、最近山本勉氏もこの考え方を支持されている[12]。これを一歩進めて、大仏殿内諸像と中門像の全八軀がまとめて計画され、その担当仏師も初めに決められたとすれば、康慶や運慶が中門像に加わらなかったのもうなずける。以上のことから、八軀は建久五年六月二十八日以降、遅くとも中門像造像が始まる同年十二月二十六日までの間に、康慶一門へ一括して注文されたと推定される。

一方、頼朝が当初は、大仏殿内諸像と中門像を大仏殿供養に間に合わせる構想を抱いていたとすれば、中門像にも幕府側奉行が存在したことを想定するべきではなかろうか。『吾妻鏡』建久五年六月二十八日条冒頭に述べられた、助成を命じられた「旁（かたがた）」とは、この時催促を受けた人々だけを指しているとは限らない。また、大仏殿内諸像についても、『続要録』造仏篇は六人の奉行のうち、観音・虚空蔵についての二人しか伝えておらず、四天王像分は記録されていないし、戒壇院造営に関しても幕府側奉行の存在を記さない。つまり、東大寺側の記録に見えないからといって、幕府側の奉行がいなかったとはいえないことになる。『吾妻鏡』にも、奉行決定の折の記事は存在しないことは前に述べた通りであり、何も問題がなかったら、奉行の名は伝えられなかったであろう。第一章の検討から見ても、この時期の支援のうちで頼朝が直接に手を下さない仕事には、幕府方奉行の存在を想定するのはむしろ自然でさえあろう。八軀がまとめて計画され、注文されたとすれば、中門像にも奉行はいたと見るべきであろう。

そこで、以上を前提にして、中門像と大仏殿内諸像の全八軀が康慶一門に依頼されたのはいかなる事情であったか

を考えてみたい。この選定を行ったのが、重源あるいは寺家なのか、幕府方なのか、いま確かな手がかりはないが、建久六年三月の大仏殿供養は大檀越頼朝のために行われたといってもよく、[13]それに至る復興事業は幕府方の大いなる支援によってなったことを考えれば、その意向が仏師選定に反映されたという従来の見方は基本的には従うべきかと思われる。ただし、頼朝自身は選定に直接には関わっていないとすれば、その場合は奉行たる御家人達の意向が何らかの作用を及ぼしたとみる他はない。[14]

そこで、いま一度『吾妻鏡』建久五年六月二十八日条に記された大仏殿内諸像六軀及び戒壇院の奉行八人をみると、確かによく知られた有力御家人が並んでいるが、いささか妙なことにも気付かれる。この八人の中に、北条氏、三浦氏、足利氏といった最も有力な御家人達が含まれないことと、大仏殿内諸像の奉行六人は現状では康慶一門との縁を持つことが知られない人物ばかりであることである。ここからは全くの推測となるが、これに関しては二通りの見方が可能かと思われる。一つは、中門像奉行の候補として北条氏らを充てることができないかということである。彼らが奉行として参加していれば、これまでの関係から見て、康慶一門を選ぶであろうことは理解しやすい。その場合、中門像が大仏殿内諸像よりも格下の像であることが気になるが、北条氏は法量が小さく負担の少ない仕事を担当し、より像高が高く、負担も大きく、供養までに間に合わせることが困難な仕事を他氏へ回したという見方もできる。加えて、大仏殿内諸像は建物の完成を待たないと開始が難しいという事情があったともみられ、[15]逆に中門像は大仏殿造営と関わりなく造立でき、供養までの完成を計算できるという利点もあったかもしれない。

しかし、それ以上に考えるべきは、総奉行の存在ではなかろうか。これだけの大事業を多くの御家人が奉行として足並みを揃えて行うのであれば、総奉行の存在は不可欠かとも思われる。同じ時期に総奉行的な人物を推定できる例として、建久四年（一一九三）五月に行われた頼朝の藍澤・富士野の御狩が挙げられる。この御狩は東国において頼

朝の覇権を天下に示す重要な意味があったと指摘されている重要な行事で、駿河国藍澤・富士野において行われた。この際、北条時政は狩りに先立って予め駿河に下向し、狩倉を見たり、御旅館の準備などを狩野介宗茂を奉行として伊豆・駿河両国の御家人に命じていることが知られている。[16] この時の時政の役目は総奉行的なものであったと思われる。しかし、御狩は藍澤・富士野だけでなく、それに先だって同年三月から四月にかけて下野国那須野などでも行われており、[17] 一連の示威行動であったことが分かる。那須野の折りは、「藍澤」の屋形を解体して事前に運び、[18] 狩り終了後に再び戻したり、[19] 狩りの付き人「御隔心なき」二十二人の筆頭に北条義時が挙げられるなど、[20] この時の世話にも北条氏が指揮を執っていたことが窺われる。恐らく時政が、この一連の御狩における総奉行の役割を担ったものとみてよいであろう。然らば、東大寺中門及び大仏殿内の諸像造立に総奉行が置かれたとすれば、北条氏を宛てるのが最もふさわしい。頼朝は、この時期、建久四年の御狩と同六年の大仏殿供養における大檀越という、いわば天下に覇権を示す大イベントを東西で相次いで行ったといえるが、御狩に次いで、東大寺供養に欠かせない諸像造立の総奉行という役を時政が行ったと見るのは憶測が過ぎるだろうか。このように考えれば、右記の二つの疑問も解決が付き、康慶、運慶への造像依頼を最も無理なく想定できるように思われる。結果的には、大仏殿内諸像は供養後の造立となり、供養に間に合ったのは中門像だけであるが、中門像は、供養の折の「後鳥羽天皇表白」に「多聞持國　新造奉安」と述べられ、[21] 比較的重く扱われている。総奉行であれば面目を保ったことであろう。

造像の奉行となった御家人たちは、北条氏を中心に仏師選定に当たったのであろう。その際、頼朝は直接選定に関わらないとはいえ、頼朝がその選定に承認を与えるような、頼朝の意向に反しない選択を何より心がけたであろう。そこで、文治年間以来の実績があり（頼朝の不興を買わないという意味も含めて）、かつ南都復興では興福寺において既にその力を示していた康慶、運慶らが、幕府側奉行の選定に適ったとみることはごく自然ではなかろうか。[22] 山本

勉氏が述べられた康慶一門の規模の大きさという問題は、新しい観点で、たしかにこうした面もあったかもしれない。ただし、東大寺復興の仏師選定に頼朝自身が直接関わってはおらず、御家人たちに任されたのであれば、やはり彼らの立場における選定基準を考えないわけにはいかない。頼朝自身と康慶や運慶との直接の関係は史料的には見出せない。この時点で康慶一門を選ぶのは、文治年間初頭におけるほど消極的選択ではなかったかもしれないが、御家人たちにとって実績があり、最も安全な（仏師としての力量という面と頼朝の承認が得やすいという両面において）選択をしたという側面は無視できないように思われる。北条氏ら有力御家人層と運慶らとの文治年間以来の関係の積み重ねが、東大寺復興という大きな舞台を得て、新たな段階を迎えたのである。

おわりに

以上、幕府による東大寺復興について検討した。その結果、第一章では、幕府による支援の主体者は頼朝であること、支援の仕方には頼朝自身によるものと頼朝が御家人に請け負わせたものの二通りがあること、頼朝が直接行った奉加の中身は、大仏鍍金及び光背漆箔のための金と、大仏開眼供養及び大仏殿供養への米・金・絹に限定されていること、第二章では、大仏光背の仏師選定に頼朝は関与していないと思われることを述べた。第三章では中門二天像及び大仏殿内諸像の仏師選定を頼朝自身が行ったとは思えないことを確認し、大仏殿供養に向けた頼朝の当初の構想は、供養前に大仏殿・中門（廻廊も含まれるか）を建立し、その安置仏を造立することにより、伽藍の中心部分を復興することにあったと推定した上で、中門二天像、大仏殿内脇侍像・四天王像の八軀はまとめて計画・注文され、担当仏師の割り当てもその当初に決まっていたと思われること、幕府側では中門像にも奉行がいたと考えられ、さらに総奉

行のような存在も想定されること、具体的な仏師選定では頼朝の承認を得ながら奉行の御家人の意向が反映したと思われること、北条氏が中心的役割を果たした可能性があること、などを論じた。

本稿では、東大寺復興を鎌倉幕府との関わりによる造像という観点から眺めてみた。しかし、幕府方による復興助成を寺家あるいは都の人々からみれば、頼朝か御家人かの区別はないはずで、全て頼朝の、あるいは鎌倉の沙汰と映ったであろう。それも一面の真実で、その意味では、中門像以降の巨像制作を康慶一門が独占したのは、文治年間以来の関係を有していた鎌倉幕府が助成していたからであるとする従来の見方は、大筋では、ないし寺家や都人からみれば間違ってはいない。いわば、西の視点である。ただし、これらを幕府の側――東の視点――から見ると、別の見方をする必要があろう。筆者は近時、北条時政が願成就院像に運慶を用いた折の判断については、頼朝が勝長寿院造仏に成朝を起用したのは彼が定朝嫡流であることが大きな理由であったことを承知していたため、頼朝の怒りを買うことを警戒し、成朝は避けて敢えて傍流の仏師を用いることとし、その中でも成朝が無位であることに配慮して僧綱位を有していた康慶は避け、その子息である運慶に落ち着いた、と推定した。[23] 頼朝と時政とでは、判断に至る過程とその基準が根本的に異なると思われる。このように、決して幕府内の全員が平等でもなければ考えを同じくするわけでもない。頼朝及び幕府を構成する様々な人々は、その身分も立場も考え方も判断基準もそれぞれに異なる。それゆえ、幕府の関わった造像をより精密に、ないし現実に即して分析することにより、個々の造像及び展開の実態が見えて来るものと考える。東大寺復興造像においても、具体的に仏師選定を行ったのが頼朝自身であったのか、御家人に裁量部分があったのかということは重要なことと思われ、後者の部分を考えることにより、この前後の彫刻史もより理解しやすいのではなかろうか。

運慶に引き継がれてゆく康慶一門の繁栄は、文治年間以来東大寺復興に至る十年余りにわたり、幕府というより、

正確には御家人達と密接な関係を築いたことが基礎となっているといえる。そして、頼朝没後も運慶一門が幕府に重く用いられるのも、北条氏ら御家人達とのこうした幾多の経緯があったからこそと考えられるのである。

注

(1) 山本勉「鎌倉時代初期の幕府関係の造像と仏師」(『清泉女子大学紀要』五三　二〇〇五年一二月)。

(2) 「武士等ウチマキテアリケル、大雨ニテアリケルニ、武士等ワレハ雨ニヌルルトダニ思ハヌケシキニテ、ヒシト居カタマリタリケルコソ、中々物ミシラレン人ノタメニハヨドロカシキ程ノ事ナリケレ」とある。

(3) 拙稿「成朝、運慶と源頼朝」(『日本橋学館大学紀要』三　二〇〇四年三月)及び「願成就院の造仏と運慶」(『金沢文庫研究』三一四　二〇〇五年三月)。

(4) 五味文彦氏は、院尊の起用を九条兼実の意向とされている。『大仏再建』(講談社選書メチエ五六　一九九五年九月　講談社)。

(5) 毛利久「東大寺復興における重源と奈良仏師」(『仏師快慶論』　一九六一年一〇月　吉川弘文館)。

(6) 武田信義は文治二年(一一八六)三月九日に没した記事がある(『吾妻鏡』同日条)。しかし、『吾妻鏡』には建久年間にも信義は登場する。この矛盾は、『大日本史料』第四編之四(一九〇五年一〇月)にも指摘されている。これについて五味文彦氏は、文治二年は正治二年の誤りであろうと推定されている(前掲注4書終章)。

(7) 堀池春峰「東大寺年表」(『秘宝　東大寺』上　一九六九年十一月　講談社)では、「頼朝、大仏脇侍・四天王像を有力御家人に割り当てて願主とし、戒壇院の再建をも急がせる。」とされる。

(8) 『大日本史料』第四編之四(一九〇五年一〇月)。

(9) ただし、廻廊が大仏殿供養までに完成していたかどうかは確かでなく、『奈良六大寺大観九　東大寺一』(一九七〇年一〇月　岩波書店)では「四面廻廊代」「南東西廻廊代」などの語がみえることから、未完成であったとされている。

(10) 田邉三郎助『運慶と快慶』(日本の美術七八　一九七二年一一月　至文堂)。

（11）田邉三郎助前掲注10書。
（12）前掲注1論文。
（13）上横手雅敬「東大寺復興と政治的背景」（『龍谷大学論集』四五三　一九九九年一月）。
（14）仏師選定が大仏殿供養後の建久七年頃に行われたとすれば、その頃の頼朝はもはや東大寺復興への関心は冷めているので、仏師選定に指示を出したとはなおさら考えにくい。
（15）浅井和春・浅井京子は、大仏殿完成まではこれらの巨像に着手しようがなかった可能性を指摘されている。浅井和春・浅井京子『東大寺Ⅱ』（日本の古寺美術七　一九八六年九月　保育社）。
（16）『吾妻鏡』建久四年五月二日条。
（17）同年三月二十一日に那須野へ出発、二十五日に武蔵国入間野で追鳥狩、四月二日に那須野に入り、二十三日に終えた。
（18）『吾妻鏡』建久四年三月十五日条。
（19）『吾妻鏡』建久四年四月二十三日条。
（20）『吾妻鏡』建久四年三月二十一日条。
（21）『続要録』供養篇末。
（22）成朝は建久五年九月二十二日の興福寺金堂供養までは生存が確認できる。御家人たちにとって、成朝は避けるということも選定における一つの基準であったろう。
（23）拙稿前掲注3。

十二世紀を中心とした鎌倉幕府の東大寺復興支援

和暦	西暦	月日	幕府関係の支援	主な事項
養和元	一一八一	10・6		大仏の螺髪を鋳造（玉葉・続要録）。
寿永元	一一八二	7・23		重源、陳和卿と大仏鋳造を論ず（続要録）。
寿永二	一一八三	2・11		大仏右手を鋳造（続要録）。
		4～5月		大仏頭部鋳造（4・19～5・18）（玉葉、続要録）。
元暦元	一一八四	1・5頃		大仏左手鋳造終わる（玉葉）。
		4・3	頼朝、伊賀鞆田荘を東大寺に返付（平安遺文四一四七）。	
		6・23	造寺長官藤原行隆、兼実に頼朝の大仏滅金料の黄金千両奉加を語る（玉葉）。	
		7・2	大江広元、秋の頼朝上洛と金の寄進を約す御教書を東大寺に奉ず（共に延期）（東大寺文書四ノ七〈平安遺文四一五八〉）。	
文治元	一一八五	3・7	頼朝、東大寺修造料として米一万石、沙金千両、上絹千疋を重源聖人に送る（吾妻鏡）。南都衆徒に書状で修造の旨趣を述べる（吾妻鏡、東大寺雑集録）。	
		8・28		大仏開眼供養（玉葉、続要録）。
文治三	一一八七	3・4	頼朝、周防国地頭に東大寺造営材木運搬への協力を命ず（吾妻鏡）。	
		3・16	頼朝、院に材木の杣出しの円滑化や勧進促進の沙汰を願う（鎌倉遺文二一九）。	

		4月	頼朝、藤原秀衡に大仏鍍金のため三万両の進上を命ずるよう朝廷に求める（玉葉9・29条）。
		9・8	頼朝、御家人の佐々木高綱が力になることを重源に伝える（鎌倉遺文二六一）。
文治四	一一八八	2・18	頼朝、東大寺修造について殊に重源に合力すべきことを中納言経房に申し渡す（吾妻鏡）。
		3・17	頼朝、重源の求めで材木運搬への諸御家人の協力を求める院宣を請う（吾妻鏡）。
文治五	一一八九	4・7	頼朝、東大寺領伊賀国鞆田荘の地頭職を停止（鎌倉遺文三八〇）。
建久元	一一九〇	10・19	
建久二	一一九一	閏12・9	頼朝、畿内・西海の地頭に佐々木高綱を奉行として明年中に柱材四十八本を運搬するよう命ず（吾妻鏡）。
建久三	一一九二	12・29	頼朝、佐々木定綱に周防国からの材木運搬を重ねて催促（吾妻鏡）。
建久四	一一九三	3・2	頼朝、周防国地頭に東大寺造営料米についての精誠を命ず（吾妻鏡）。
建久五	一一九四	3・12	
		3・22	頼朝、大仏御光料（漆箔）の砂金二百両を仏師院尊に下すため、京都へ送る（吾妻鏡）。
		5・10	頼朝、大仏御光料（漆箔）の砂金百三十両を京都の一条能保へ送る（吾妻鏡）。

大仏殿上棟（吾妻鏡、玉葉、造立供養記）。

大仏光背制作始まる。大仏師法印院尊、弟子六人（法眼院實、法橋覚朝、法橋院圓、法橋院範、法橋院俊、法橋院康）、小仏師六十人（続要録）。

		6・28	頼朝、大仏殿内脇侍・四天王像造立及び戒壇院造営の遅引を奉行の御家人に催促する（吾妻鏡）。
		12・26	
建久六	一一九五	1・17	
		3・10	頼朝一行、東大寺（大仏殿）供養のため参着（玉葉、吾妻鏡）。
		3・11	頼朝、米一万石、黄金千両、上絹千疋を奉加。また、馬千疋を東大寺へ奉納（吾妻鏡）。
		3・12	頼朝、大仏殿供養に臨席、軍兵数万警護（吾妻鏡、玉葉、続要録）。
建久七	一一九六	6・18	
		8・27	
建久八	一一九七	2・29	
		4・28	
正治元	一一九九	1・13	頼朝没（百錬抄、猪隅関白記、明月記）。
		6月	

	中門二天造立始め。多聞天は快慶、持国天は定覚（続要録）。
	中門上棟（玉葉）。
	勧賞により、運慶、法眼位を授けらる（康慶譲）（続要録）。
	大仏脇侍像造立始め（8・27まで）。如意輪は定覚と快慶、虚空蔵は康慶と運慶（鈔本要録、続要録、造立供養記）。
	大仏殿内四天王像造立始め（12・10まで）。持国運慶、増長康慶、多聞定覚、広目快慶。（鈔本要録、続要録、造立供養記）。
	コノ年　宋人石工字六郎ら四人、石造の大仏殿内脇侍・四天王、中門石獅子造立（造立供養記）。
	鎮守八幡宮上棟（要録、東大寺八幡験記）。
	戒壇院金堂建立（8・28まで。造立供養記）。
	南大門上棟（別当次第、南無阿弥陀仏作善集）。

建仁元	一二〇一	12・27		快慶作僧形八幡神像開眼供養（像内銘）。
建仁三	一二〇三	10・3		南大門仁王像開眼供養（別当次第、続要録）。
		11・30		東大寺供養（続要録、明月記、百錬抄等）。